

自校のよさを生かして協働する学校組織運営の在り方

－ 教科等横断的な道德教育の取組を通して －

尾崎 飛鳥

教育実践高度化専攻 学校運営コース

1 テーマ設定の理由

令和3年1月の中教審答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難な中で、子供たちの資質・能力を確実に育成する必要があると示されている。また、小学校学習指導要領解説「特別の教科 道德編」は、予測困難な未来社会の変化に対応するための資質・能力を備える道德教育の役割について示している。資質・能力の育成には教育課程の計画的・組織的な運営によるカリキュラム・マネジメントの実現が必要不可欠である。

現任校の北茨城市立華川小学校は、全校児童12名の完全複式学級の小規模校である。児童は素直で奉仕的活動に率先して取り組み、学年を越えて助け合う姿が見られる。一方で、多様な意見に触れにくく、自分の意見が通ってしまう機会が少なくないため、道德的価値の育成が必要である。教職員は12名で、全教職員で全児童を見守る親和的な雰囲気があり、学年の枠を越えて児童に関わっている。しかし、校務分掌が重複し、教師個人の裁量で業務にあたることが多く、組織的な推進の工夫が必要となっている。

以上のことから、6年間を見通した計画的な道德教育を組織的に推進することで、教職員同士の連携が強化され協働する組織が構築されることが考えた。その取組として、教科等横断的な視点による道德教育のカリキュラム開発に自校のよさを生かすことが効果的と考え、本テーマを設定した。

2 研究の視点

- (1) 道德教育を軸とした教科等横断的なカリキュラム開発と実践を通して、協働する学校組織にどのような効果をもたらすかを明らかにする。
- (2) 教科等横断的な道德教育の取組のために、組織的に取り組む体制の整備、運営の在り方を明らかにする。

3 研究の内容

- (1) 基本的な考え方

① 道德教育で育む資質・能力（道德性）とは

学習指導要領の総則第一章は、道德性の育成が道德教育の目標としている。また、小学校学習指導要領解説「特別の教科 道德編」第二章は「道德性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性」であり、「道德的実践につなげていくことができるようにすることが求められる」と、実践との関係を説明している。したがって、道德教育で育む資質・能力は道德科を要として内面的資質を育み、教科等横断的な実践の場を通して表出させていくものと捉えた。

② 協働する学校組織と道德教育とは

北神（2011）は、今後の学校組織の在り方に対し「個々の教員の創意工夫や努力といった個別的

対応では解決を図ることが困難な状況にある」と指摘し、教員集団による協働体制の構築の必要性を示している。また、学習指導要領解説「総則編」には「各学校においては、(中略) 道德教育の目標を踏まえ、道德教育の全体計画を作成し、校長の方針の下に、道德教育の推進を主に担当する教師(以下「道德教育推進教師」という。)を中心に、全教師が協力して道德教育を展開する」と、組織的な指導体制の大切さが示されている。道德教育の基盤は全ての教職員が目標や手立てを共有して教育実践していくものであり、協働する学校組織がカギとなるといえる。

③ 教科等横断的な道德教育とは

道德教育は各教科等のあらゆる教育活動全体を通じて行い、道德科は各活動における要として、相互を補ったり、深めたり、発展・統合をさせたりする役割を果たしている。押谷(1999)は「各教科や特別活動、総合的な学習の時間等の特質を生かして行われる道德的価値にかかわる学習を、道德の時間を中心に有機的なまとまりをもたせて子どもの意識の流れを大切にしたい道德学習ができるように計画」することの大切さを述べ、総合単元的な道德学習を提唱している。つまり、実践を重ねることで道德性を育む場を総合的に捉えていく方策であり、道德性の育成に係る教科等横断的な教育活動と捉え、総合単元的な道德学習を本研究に導入することにした。

(2) 研究の構想

① 道德教育推進のための組織体制の整備

学校が教育目標の実現に向かう道德教育の推進に向けて、全教職員が参画する体制を構想した。道德教育推進教師、保健主事、養護教諭、教務主任の他に、知・徳・体の学び・心・元気の華の3つのチームリーダーを道德教育推進委員会のメンバーに入れた。チーム制にしたことで役割が明確になり、チームごとの主体性や自立化の促進、教職員一人一人の意識が高まると考えた。

② 組織推進計画

道德教育推進委員会や3つのチームを用いて組織を活用する道德教育推進計画を構想した。自校のよさを共有して教育計画に生かすSWOT分析、全教職員が同じベクトルで取り組む目標の共有、目指す児童像に向かう資質・能力の設定など、組織を活用して行っていくことで、全教職員が協働する組織への関わりが深まると考えた。

③ 教科等横断的な道德教育のカリキュラム開発(総合単元的な道德学習)

児童の実態を全教職員で捉え直し、道德教育の目標や方針、重点内容項目を共有し、道德科の授業と各教科等の教育活動を関連付けたカリキュラム開発の構想を立てた。総合単元的な道德学習の実践の場として既存の行事である「華小まつり」を位置付け、計画や立案を道德教育推進教師と進めた。道德教育全体計画に基づいた実践ごとに、推進委員会やチームを生かした組織マネジメントを行いながら、成果と改善を次の実践につなげ、教育活動の質の向上を図るようにした。

4 研究の実際

(1) 自校のよさの共有: SWOT分析

自校のよさと弱みを捉えるために全教職員でSWOT分析を行った。内部環境、外部環境から分析を行い、児童や教職員のよさをもとにした強みとして捉え直し、客観的な整理ができた。

(2) 目標の共有: クロス分析

SWOT分析の結果から本校の強みや弱みをもとにクロス分析を行い、次年度に向けた施策を検

討する研修を行った。この協議から「児童のよさ」と「目標の共有」という2つのキーワードに集約され、次年度に向けた今後の方向性を教職員で共有することができた。加えて、このキーワードについて学校長への具申を行った結果、今年度のグランドデザインに反映された。

（３）組織の活用

新体制となった道德教育推進委員会では、道德教育に関する検討事項を起案・協議し、必要に応じて年間計画の見通しや研修計画、役割を決定した。協議や研修を通して、教職員の道德教育に対する意識付けや参画の在り方について考えが深まった。具体的な行事（華小まつり）を手立てとした道德教育の推進が決まって以降、知・徳・体のチームごとに検討が始まった。チームで検討した内容について各リーダーから起案され、推進委員会で進捗状況の報告やチーム間の調整を行った。チーム同士のやりとりが状況に応じて自主的に行われるようになり、相互の連携が生まれた。

（４）道德教育全体計画の見直し

推進委員会で児童の資質・能力を高めるという視点から道德教育全体計画について協議したところ、学年の重点目標について学年ごとの系統性にずれがあることが分かり、6年間の系統性を重視して見直しを行った。重点内容項目との整合性、より具体的な姿に表す視点でも見直した。推進委員会を活用し、各校務分掌の立場から参画する機会が増え、組織として推進する素地ができた。

（５）総合単元的な道德学習（華小まつり）の計画

児童の資質・能力を育むための具体的な実践に向けて、年間行事の中でも学校・保護者・地域が一体となって取り組む「華小まつり」を道德教育の実践の場として位置付け、推進することになった。そこで、「華小まつり」を通して目指す児童の姿について職員研修を行い、児童一人一人の「主体的に取り組む姿」を目指していくことが共通理解された。その後、各学年の総合単元的な道德学習の実施について、道德教育全体計画〔別業〕を活用して、学級担任が詳細な計画を立案した。指導の流れに児童の活動や保護者・地域との連携の流れを併せ、指導計画を全学年で作成した。随時、短い時間の推進委員会や、推進教師を中心に学年間の連携を確認する時間が設けられ、学び・心・元気のリーダーとの進捗状況の確認や共有がされた。

（６）保護者・地域との目標の共有

資質・能力の育成に向けた推進委員会の協議において、児童一人一人に具体的なめあてをもたせること、保護者・地域とも目標を共有することが確認された。そして、学校運営協議会とたよりの活用を図ることになった。学校運営協議会では、協議委員に向けて「華小まつり」を通して育てたい資質・能力や具体的な児童の姿について、イメージ図をもとに説明し、共有を図った。さらに、たよりを随時発行し、「華小まつり」のスローガンに込めた児童の思いや学年ごとの目標などについて発信した。親子調理体験に参加する保護者とのメニュー検討会でも、「華小まつり」の目標を共有したうえで、児童が考えたメニュー案について意見を出してもらい、検討した。

（７）児童との目標の共有と実践

児童と「華小まつり」のねらいや身に付けたい資質・能力を共有し、目標をもたせた。そして、全ての児童を学びの華・心の華・元気の華チームの縦割りに分け、計画や準備を進めた。学びの華チームは「華小まつり」のスローガンや和太鼓鑑賞会の計画を進めた。心の華チームは自然薯栽培の講師へお礼の会の準備、地域交流会の検討を行った。元気の華チームは、親子調理体験に児童が育ててきた自然薯とさつまいもを材料として使うことになった。さらに自然薯の収穫時に講師の方

から自然薯栽培の歴史について学んだことで、当日にメニューの紹介と共に歴史の紹介をするなど、活動内容が展開された。チームごとに児童の意見を吸い上げながらねらいに沿った活動を考え、同じ目標に向かって「華小まつり」の実践に取り組んだ。

(8)「華小まつり」に向けた各チームの実際

チームリーダーは児童との準備はランチミーティングや休み時間を主として運用し、チームメンバーの教職員とは授業の空き時間や放課後を使って打合せを行う姿があった。また、情報共有のしやすさという本校の強みを生かし、週に一度設けている職員集会をチームごとの進捗状況や確認を行う場として利用することで、チームリーダーから各チームの現状を報告して全体で共有するようにした。このサイクルが生まれてくると、チームリーダーとチームメンバー同士で、または、チームリーダー同士で協働する機会が増え、相互の連携が生まれた。

(9)「華小まつり」の実施と振り返り

当日は、親子調理体験で作ったメニューを地域の方へ振る舞って感謝の気持ちを表したり、地域の方々と保護者と昔遊びで交流して地域のよさを実感したりと、各チームの計画をもとに児童主体で取り組めた。児童がそれぞれの目標をもって実践につなげ、目標に向けて主体的に取り組む姿があった。各教科等で育成された道徳性が、実践の場を通して表出された活動になったといえる。

「華小まつり」の実施後、「〇〇が楽しかった」といった感想にとどまらず、目標に沿った児童の振り返りがあり、「自分のよさを伸ばし、相手のことを考えて伝える力」という資質・能力を高めることができたと考える。また、参加した保護者・地域からは「児童が主体性をもって取り組んでいる姿が印象的」、「地域を活用した栽培を取り入れ、児童の成長に様々なことを経験させていてよい」といった感想があった。「華小まつり」を単なる学校行事ではなく、総合単元的な道徳学習の実践場面にし、保護者・地域と目標を共有したことで、児童の姿で表れたことが成果になった。

5 研究の成果と課題

成果として「華小まつり」という既存の学校行事を総合単元的な道徳学習に位置付け、カリキュラム開発や実践をしたことで、教職員が目標を共有して教科等横断的に取り組む大切さを意識化することができた。また、リーダー中心の組織を基に、学校全体で児童の資質・能力を育む指導体制を構築したことで、教職員の協働に対する意識を高めることができた。今後の課題として、学校全体で道徳教育を推進するためのPDCAサイクルの確立が必要になる。さらに、社会総がかりで児童の資質・能力を育み、学校運営協議会や保護者・地域と協働した教育活動の展開も必要と考える。各教育活動を児童の資質・能力を育む場として捉え直して保護者・地域と目標を共有して推進し、新たに位置付けた道徳教育推進委員会の活用について、次年度以降の在り方を考えていきたい。

6 引用・参考文献

中央教育審議会（2021）答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』 22 項

文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」、「総則編」

北神正行（2011）『学校管理職の経営課題 第4巻』 ぎょうせい 10 項

押谷由夫（1999）『新しい道徳教育の理念と方法』 東洋館出版社 86 項